岡山市を南北に流れる西川用水。市内中心部を流れているにもかかわらず、絶滅危惧種をはじめ、さまざまな淡水魚や貝類などが生息している。北区下石井の環境学習センター「アスエコ」では、身近な自然について考えてもらおうと、西川の生物を集めた「アスエコ水族館」を開いている。展示されている魚やその育成などを紹介する。【江見洋】

身近な自然 考える

「アスエコ水族館」 30種150匹

希少種も含め38種類の魚が確認されている西川用水 =北区で

西川用水は旭川の水を岡山市東部の水田地帯に供給する全長18.5キロの農業用水路。約1300年前に吉備国「最上堰」に水を引くための用水路があったといい、江戸時代の1615年に岡山藩主となった池田忠雄が生誕に着手した。50年ほどから、市内中心部では生活排水が流れ込み、環境が悪化した。水路にふたがしてある区間もあったが、下水道整備や環境公園化が進み、希少種が住める程度の環境を取り戻した。

アスエコでは昨年、子どもたちが参加して「お魚探検隊」を結成。今年5月の調査では絶滅危機、エビの仲間3種、準3種、貝の仲間1種、水草5種が確認された。「水族館」では魚やエビ、貝など30種約150匹を展示している。

オヤニラミは環境省レッドリスト、同県レッドデータブックともに、絶滅の危機が増大している絶滅危惧II類に指定されている。えらぶたの斑紋がにらんでいるように見えることから、この名前が付いた。

体の2本のラインが特徴的なスジシマドジョウ（中国種）。県内では生息条件の変化によって採取数が減少する可能性があり、環境省では絶滅危惧II類に指定されている。

西川に生息する淡水魚などを展示する「アスエコ水族館」 =北区下石井の環境学習センター「アスエコ」で

西川用水 豊かな生態系紹介

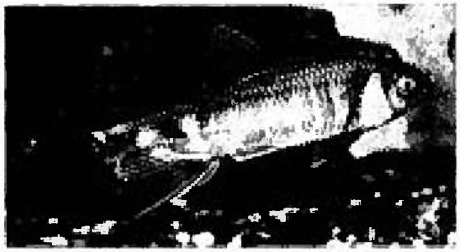
環境省、県ともに絶滅危惧II類に指定されているオヤニラミ。えらぶたの斑紋がにらんでいるように見えることから名前がついた

体の2本のラインが特徴的なスジシマドジョウ（中国種）。県内では準絶滅危惧種だが、環境省では絶滅危惧II類に指定されている

アブラボテも準絶滅危惧種。婚姻のような鮮やかな色が特徴で、繁殖期でさらに赤くなっている

準絶滅危惧種のゼリタナゴ。繁殖期を迎え、尾びれが朱色になっている

西川用水の生態系の頂点に君臨するナマズ。まだ稚魚だが、堂々として風格は十分



雌が繁殖期のオイカワ。婚姻色の鮮やかな赤色が見た目にも涼しげだ

同じタナゴ類のゼリタナゴとアブラボテは、環境省、県内とも絶滅危惧種。いずれも繁殖期を迎えているが、尾びれなどが朱色になって鮮やかなゼリタナゴに比べ、アブラボテは前半のような派手さはなく、色がさらに濃くなっており、同じ水槽内でも判別を困難にしている。

また、ゲンゴロウブナは環境面で近い将来絶滅の危険性が高い絶滅危惧I類だが、西川では普通に見られる。これは放流・増殖用の個体群であるゲンゴロウブナが減少しているのに対し、このブナを繁殖したヘラブナが県内で養殖されているため。こうした魚は「移入種」とは扱われ、元々はいなかった場のため、生態系に影響を与えている。

一方、希少種保護にも見どころがいっぱいだ。国産で西川の生態系の頂点に君臨するナマズ。展示されているのはまだ稚魚だが、堂々として風格は十分。ナマズが育つ環境はえさとなる魚が生息し、豊かな生態系が残されている証拠という。またコイ科のオイカワという魚は雄が繁殖期で、婚姻色の鮮やかな赤色が見た目にも涼しげだ。

岡山理科大で生物などを学んでいる山口諒夫さん（20）と幸本真奈さん（20）は「こんな街中の川に、なぞなぞの魚がいるのにびっくり。西川の保全にも関わっていきたい」。アスエコ生涯学習センターのカウンセラーの山田昭弘さん（40）は「西川にいろいろな魚がいることを知ってもらい、環境を守るために何をすべきか考えるきっかけにされば。子どもさんの自由研究にもなり得る」と話している。

「アスエコ水族館」は8月30日まで。18日には西川にも生息しているウナギの生態について、東京大学農学部の塚原健三さんが講義する。問い合わせはアスエコ（086・272・7272）。